

街の笑顔と未来を売る商店街

鹿児島県・鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 2年 木田 夕菜

「いらっしゃい、いらっしゃい。」

元気な声が響く。商店街の脇の公園に並ぶクレープ屋やかき氷屋で呼び込みの声を上げているのは私と同じ中学生だ。「中学生商人(あきんど)選手権」と名付けられた取り組みは、市の南部に昔からある商店街がバックアップして行われた。地元の中学生在が3人1組で、商店街が支給した1万5,000円分の商品券を元手に3時間で売り上げを競うというものだ。品物を売る中学生の生き生きとした表情とそれを見守る周りの人々の穏やかな様子。その光景をニュースで見た私は、思わず画面に引き込まれる思いがした。

私の住む街からは少し離れた場所にあるこの商店街は、近くを家族と自動車を通ることはあっても、足を止めてみたことは一度もなかった。不思議と興味を引かれた私はバスと市電を乗り継ぎ、行ってみることにしたのだ。

市の南部にあるこの地域は約4年前に大型のショッピングモールが開店してから大きく変化した。それはこの施設だけでなく、隣接した場所に、大手の資本による大規模な商業施設が次々とオープンしていったからだ。

この商店街はこれらの地域から車で5分程度の場所にある。昔からある住宅地と幹線道路や市電の電停とをつなぐ場所に数十軒の店舗が連なっている。近年、シャッター通りという言葉で揶揄されるように、全国のあちこちで大規模商業施設の進出によって既存の商店街はどこも活気を失っていると聞いていた。

私が市電を降りてその商店街に立ったのは夏休みのある一日のことだった。その為、乗降の学生たちもほとんどいなかった。だから、おそらく商店街も閑散としているだろうと予想していた。しかし電停に面した店舗の前に立った時だった。私の耳に響いてきたのは、

「はいはい、今日は、何にしますか。」

という威勢のいい声だった。見ると「まちの駅」と書かれた店舗を含めて数店舗

が連なったその区画には、たくさんの新鮮な野菜が並べられ、まだ午前中だというのに、お年寄りから若いお母さんまでが店の中で買い物をしていたのだ。どのお客さんもお店の人と顔見知りのようで世間話をしながら楽しげに品物を手に取って見ている。その時、集合店舗の2階から賑やかな子どもの声が聞こえてきた。上を見上げると、木の扉に「放課後児童お預かり」と書いてある。何と商店街のまん中に保育施設があるのだ。目を丸くしている私の横を、中学生が先程の「まちの駅」に入っていった。慌てて後を追って入ると、その中学生は店の人に軽く会釈したかと思うと、中程に設置してあるコンピュータを自由に使い始めたのだ。店の入り口には、「まちの情報案内～ご自由にお入りください～」と大きく書いてある。店の壁へ目をやると、地元の小学生からの手紙や地域の掲示板、空き店舗を利用した、イベントスペースで行う催し物の案内等が、ところ狭しと貼られていた。

そうか、そうなのだ。この商店街は単に物を売り買いする場所ではないのだ。商店街自体がこの地域のコミュニティスペースになっているのだ。だから、子どもを預かったり、自由に使えるパソコンを置いていたりするのも、地域の様々な催し物をここで開催するのも、全てここに集う人々の交流を後押しするためのものなのだ。気付くとお米を1kg単位で販売していた。その理由を聞くと、お年寄りには通常の5kg袋は重たくて家まで持って帰れない。だから少しずつ量り売りしてくれているのだそうだ。

大規模の商業施設には、遠くからたくさんの人々が集まる。そこでは売り手と買い手が商品の購入に関する会話はしても、それ以外のことは語られることはない。しかし、この商店街のあちこちで聞こえるのは、「おはよう、暑いね」というあいさつや世間話なのだ。以前、離島に住んでいた私は都市部に引っ越してきてから同じマンションに住む人の名前すらよく知らないことを思い出した。私の住む地域は郊外型の店舗が多く、そこでは、たまに友達と会うことはあっても地域の人々と会話することなどほとんどない。それがこの商店街では年配の方と中学生、若いお母さんたちが当たり前のようにあいさつを交わしていく。値段や便利さに代えられない大切なものがこの商店街には満ちている。だからこそ、この商店街には活気があふれ、地域の人々が足を運ぶのだ。商店街の活気は、この街の活気だ。コンピュータ等の非対面型コミュニケーションが広がる一方で、

ここではこの地域に住む人と人とをしっかりと結びつける役割をこの商店街は担っている。

「中学生商人(あきんど)選手権」の目的は、地域に親しみを持ち、地域を担う人材育成をめざすことなのだそうだ。この商店街が売っている物は品物だけではない。様々な取り組みを通して街に響く歓声、たくさんの笑顔、そしてこの街の未来なのだと思う。

